

人生じんせいを生きいていると、自分じぶんのやりたいことだけをやりながら過すごせるというのはあり得えないし、自分じぶんの思い通りおもにならない場合ばあいの方がもっと多いほうと思います。むしろ、やりたくないことも頑がん張ばってやらなければならない、また、思い通りおもにならなくても、それを我慢がまんしなければならない場合ばあいがほとんどではないか、という気きがします。でも、人間にんげんはそういう風ふうに生きて行くいることによって、少しすこずつ成長せいちょうしていくものではないかと思おもいます。そう考かんえてみると、「生きることは旅たびすること。終わりのないこの道みち。」という、ある有名ゆうめいな歌手かしゅの歌詞かしが頭あたまをよぎります。そして、信仰しんこうの道みちも同様どうようで、「信しんじることは旅たびすること。終わりのないこの道みち。」と歌うたいながら信しんじて行けば、わたしたちの信仰しんこうも少しすこずつ成長せいちょうできると思おもいます。今日の福音きょうふくいんの御言葉みことばは、その信仰しんこうの道みちの単たん純じゆんさと、その道みちを歩あゆむための正ただしい姿勢しせいについて語かたっているようです。

今日の福音きょうふくいんの中なかで、弟子でしたちはイエス様さまに自分じぶんたちの信仰しんこうを増ましてくださいと願ねがいました。それについて、イエス様さまは先まず、この世よの中なかで最もっとも小ちいさな種たねであるからし種だねほどの信仰しんこうがあれば、桑くわの木きを海うみに移うつし、しかも、その海うみに根ねを張はらせることさえできると教おしえられました。それは、ご自分じぶんの弟子でしたちにその小ちいさな信仰しんこうさえ持もっていないことを戒いましめるためではなく、信仰しんこうが持もつ計はかり知しれない力ちからについて教おしえるためでした。たっひとことことで桑くわの木きを海うみに移うつらせ、しかも、その木きがしよっぱい水みずに根ねを張はるなどと、世よの中なかの常じょう識しきではあり得えないことでしょう。しかし、イエス様さまは神様かみさまのお望のぞみに適かなうことだったら、それが必かならず叶かなえられると信しんじることによって、それができると教おしえられました。言い換いえれば、信しんじるというのは、何なんでもかんでも自分じぶんの思い通りおもになるよう希き望ぼうしながら信しんじるのではなく、神様かみさまのお望のぞみどおりになるこ

とを願ねがいながら信しんじることです。そして、その神様かみさまのお望のぞみに、自分じぶんが役立やくだつものとなることを希望きぼうしながら信しんじること、それこそが信仰しんこうのある人ひとたちの正ただしい姿勢しせいなのです。その姿勢しせいを教おしえるために、イエス様さまはある主人しゅじんとその僕しもべのあるべき姿すがたを例えたとはなし話はなしとして聞きかせてくださったわけです。

この例え話たとの中なかで、今日注目きょうちゅうもくしたいのはその僕しもべのことです。彼の仕事かれ しごとは「畑はたけを耕たがやすか羊ひつじを飼かうかする」こと、つまり、彼かれには家いえの外そとでの仕事しごとが任せられていたわけです。家いえの中なかで働はたらいている僕しもべにとって、外そとの仕事しごとが分かるわけがないのと同様に、外そとの仕事しごとをやっている彼かれにとって、家いえの中なかの仕事しごとが良く分かるわけがありません。でも、主人しゅじんは自分じぶんが外そとの仕事しごとを任せた僕しもべに、自分の食事じぶん しょくじを準備じゅんびし、更に、自分さらが食事じぶん しょくじをする間あいだ、傍そばで給仕きゅうじするようにと指示しじしました。その指示しじに対して、例えば、たと「いえ、わたししごとの仕事はたけは畑たがやを耕ひつじすことです。」とか、「わたしは羊ことの事わしか分かりません。」とか、或あるいは、「食事しょくじに関してはわ分かりません。」などと答こたえるのは、僕しもべにとってあり得えないことでしょう。もしかしてその僕しもべにとって、主人しゅじんの食事しょくじの準備じゅんびや給仕きゅうじすることが、彼かれの人生じんせいにおいて初はじめてのことかもしれません。でも、彼は手てを尽つくして主人しゅじんの食事しょくじを用意よういし、また、主人しゅじんが食事しょくじをしている間あいだ その傍そばに立ち、心こころを込こめて給仕きゅうじしていたに違ちがいありません。その僕しもべの姿すがたこそが、わたしたちがあるべき姿すがたであるのは言うまでもないでしょう。

今日の第二朗読きょう だいにろうどくで使徒しとパウロは、「わたしたちの主しゅを証あかしすることも、わたしが主しゅの囚人しゅうじんであることも恥はじてはなりません。」という言葉ことばで、テモテを励はげましました。

テモテはパウロが手を置いて神様に聖別され、「イエス様によって与えられた信仰と愛を持って」エフェソ教会の司教となった人でした。イエス様を信じるのは恥ずかしいことのように認識され、信仰のある人たちが迫害されていたその時代、教会の指導者となるのは、何と恐ろしく怖いことだったでしょう。それは今日の第一朗読に記されているように、その昔、神様の預言者たちが様々な迫害や反対、暴力と不法の状況に巻き込まれたことと同様だったに違いありません。しかし、彼らは「神様に従う人は信仰によって生きる。」という神様の御言葉に励まされ、その全ての逆境を乗り越えました。それと同様に、パウロはテモテのために祈りつつ、彼が神様からいただいた聖霊に導かれ、色々な反対や迫害に打ち勝つことができるように力づけてくれたのです。

信仰の道とは、信仰のある人たちだけが歩める愛の旅路です。イエス様はその道を歩む人たちのために、御言葉を通して自らが手本と道案内人となり、更に、ご聖体を通して、その旅路の糧となってくださいます。神様はわたしたちがその道を歩むことによって、わたしたちは勿論、もっと多くの人たちが、イエス様を通して全うされた救いに与ることを望んでおられます。そのために神様は様々な形の仕事をわたしたちに任せ、それに必要な知恵と力と恵みを与えてくださいます。自分のやりたいことを、自分なりの思いややり方で行うのではなく、神様のお望みを真剣に探りながら、それに純粋に従うべきです。神様を信じることは旅すること、その旅路を最後まで歩まねばなりません。その道を、一粒のからし種ほどの信仰を持ってひたすら歩いて行ったら、神様は多くの実を自ら結んでくださるに違いありません。信者

の^{みな}皆さんがイエス^{さま}様の^{みことば}御言葉とご^{せいたい}聖体に^{はげ}励まされ、その^{みち}道を^{あゆ}歩み^ぬ抜くことができるよ
う、^{いの}お祈りいたします。